

「あなたがたの目は見ている」 — マタイによる福音書講解説教 61 —

イザヤ書 第6章 9～10節  
マタイによる福音書 第13章 10～23節

「しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。」(6節)主イエスは、人々になさったたとえ話を弟子たちに解説するようにお語りになりました。

今日の聖書箇所のおすぐ前の部分(13章1節～9節)のたとえ話です。ある人が種をまきに行った。すると、ある種は道ばたに落ちて鳥が食べてしまった。別の種は石地に落ちて枯れ、またほかの種はいばらの地に落ちて伸びることができなかつた。しかし良い地に落ちた種は実を豊かに結んだ、という話です。当時のパレスチナ地方では、まず最初に種を蒔いて、それから土地を耕したようです。当然種は風に飛ばされて本来の畑以外のあちらこちらに落ちたのです。

主イエスは弟子たちがこのたとえ話の意味を尋ねてくるのをお待ちになっていたかのように、口を開かれました。イザヤ書6章から引用して、弟子たちの姿と、今ここにいる私たちの姿を描き出されたのです。

『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。／見るには見るが、決して認めない。／この民の心は鈍くなり、／その耳は聞えにくく、／その目は閉じている。』(14節b～15節) 私たちも、あの律法学者やパリサイ人のように、自分の目や耳、五感を総動員しても、神のことが見ることができず、認めることができません。自分が期待する神、想像できる救いを求めるからです。

一人で聖書を読んでも、少しもその声が聞こえてこなくても、礼拝に集まって皆で一緒にみ言葉に聞き入る時、神は私たちの信仰の目を開き、心の耳を開いて語りかけ、信仰を与えて下さいます。教会が生まれた時以来、洗礼を受ける時の信仰告白はひとつでした。そしてそれは、ただ聖霊によって与えられるものです。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」(コリント人への第一の手紙 12章3節)

主イエスは、神が私たちの目を開き、耳を開いて下さる時が来た、と旧約聖書の約束を口にされました。神によって信仰が与えられ、罪の赦しの洗礼が授けられて救いに入れられる。その約束の日が来た、と主イエスは言われたのです。神が天国の奥義をお示しになる時が来たのです。マルコによる福音書を見ると、主イエスの第一声は「神の国は近づいた。悔い改めて福

音を信せよ」(マルコによる福音書 第1章15節)でした。主イエスが口を開いて神の国の福音を語り始めて下さった時、もう既に神の力がこの世界全体を捉え、私たちを包み込んで下さっていることがはっきりしたのです。

聖霊によって信仰の目が開かれ、神の国の奥義を知る日が来ました。奥義(ミステリオン)とは、隠されたものです。神の時が来て、覆っているものが取り除かれて初めて、そこにある真実が見えるようになるのです。主イエスがおいでになった時、奥義のベールが剥がされて、神の救いの約束が明らかになりました。

代々の教会は、この種まきのたとえを、特にこどもたちに語り続けてきました。良い地になりなさいというのではありません。神に愛され、救いの種をまかれ、耕され、手入れをされて豊かな実を結ぶようになる、神の救いの約束を、こどもたちに伝えてきたのです。

人間が考え出した宗教や思想は、自分の力や努力によって良い地になるようにと勧め、実を結ぶための道筋や努力の方法を教えます。しかし神は、まず私たちを愛して下さいました。私たちがまだ神を知らず、神の敵であった時に、神はひとり子主イエスを与え尽くしてまで、私たちを愛し抜いて下さいました。主イエスは、この神のみ心を誰よりもよくご存知でした。ご自身の苦難と死、復活と昇天とをもって、神の愛が最も激しく現されることをご存知でした。

主イエスによって目と耳が開かれたことは本当に幸いなことです。聖霊が語りかけて下さる言葉を、力ある救いの種を蒔かれている私たちは幸いです。今、主イエスの霊が、天国の奥義を開いておられます。主イエス・キリストを信じて、永遠の命を得て生きるようにと招いておられます。主イエスが肉を裂かれ、血を流されたのは、あなたに命を与えるためでした。主の食卓(聖餐)において私たちは、神の激しい愛を、目で見、手で触れ、舌で味わいます。神の約束が確実であることを、この食卓において確認します。そうして、神の食卓にふさわしくない私たちに、ただキリストの義をまとわせて神の子と呼び、神の国の食卓に招き入れて下さる神の恵みに感謝します。私たちは、代々の信仰者たちのように、この神の国の奥義を知らされた者として歩みましょう。

(記 岡村 恒)